

# 源氏物語画帖「源氏御手か、み」(同志社大学所蔵)の再考察

——名古屋博物館蔵「白描源氏物語画帖」との比較——

岩 坪 健

同志社大学が所蔵する源氏物語画帖「源氏御手か、み」(以下、「源氏御手」と称する)は、詞書も絵(淡彩画)も五四枚揃っている。それについて紹介した際、他の作品には見られない図として数例を取りあげた<sup>①</sup>。しかしその後、似た画帖が現われたので、改めて考察する次第である。

「源氏御手」と似る作品は名古屋博物館所蔵「白描源氏物語画帖」(名古屋博物館と略称)で、現存する五四図の絵がすべて公開された<sup>②</sup>。詞書も巻名も無いが、「源氏御手」が「場面の設定や構図において、他の作品には見られない図が散見される」(注①の小稿)と指摘した五図(A-E)は、名古屋博物館と似通うのである。そこで以下、前稿の文章をAから順に行頭二字下げで引用してから名古屋博物館と比較する。また末尾に図を掲載する。

## A 第二十五帖(螢の巻)

まず詞書を全文引用する。「宰相の君とて、手などもよろしく書き、おほかたもおとなびたる人なれば、さるべきをりをりの御返りなど書かせたまへば、召し出でて、言葉などのたまひて書かせたまふ。」(③一九七頁)<sup>③</sup>。これは玉鬘に送られてくる多くの恋文に対して、養父の光源氏が宰相の君という女房を呼び出して返事を指示している箇所である。このあと求婚者の一人である宮が訪れ、源氏が螢を放つという、当巻を代表する名場面が続く。絵では室内に源氏と玉鬘が向かい合い、隣室に手紙を両手で広げて持つ女房が控えている。この場面を描いた例は、管見の限り見当たらない。

名古屋博物館とは三人の配置が一致する。向かって左から玉鬘と光源氏、この二人は向き合い、右端に控える女房は手紙を広げて持ち

傍らに硯箱を置く、という構図が共通する。

B 第五十帖(東屋の巻)

当巻は『国宝源氏物語絵巻』では、薫が浮舟の隠れ住む三条の小家を尋ねたところを描いている。簀子に薫が腰掛け、室内では薫より早く訪れた弁の尼が浮舟たちと話をしている。一方、本画帖(岩坪注「源氏御手」を指す。以下同じ)では室内に薫と弁の尼が対面しているだけで、ほかの人物は見られない。詞書は、薫と呼ばれた弁の尼が「戸口にぬざり出でたり。」(⑥九〇頁)のあたりで終わり、そのあと薫が簀子に座る場面に移る。よって本画帖の詞書の箇所では薫はまだ屋外にいて、絵とは合わない。そのあと物語では薫が入室して浮舟と会うが、弁の尼と薫が話すのは翌朝であり、本画帖がどの場面を描いたのか釈然としない。

両作品とも、冠直衣姿の男君が白い頭巾をかぶった尼と燈台を挟んで話している。名古屋市博本は巻名が記されず詞書もないため、藤田紗樹氏は巻を特定せず「場面不明」とされた。前稿では舞台を平安京と見たが、その前に宇治を訪れた薫が弁の尼に会い、浮舟との仲を仲介してほしいと頼む場面ではなからうか。ただし物語では、「薫は」長押にかりそめにゐたまひて、簾のつま引き上げて物語したまふ。(弁の尼は)几帳に隠ろへてあたり。」(⑥八五頁)とある

が、絵では二作品とも兩人を隔てるものはなく直に顔を合わせている。

C 第三十五帖(若菜下の巻)

当巻の巻頭近く、六条院において競射が催されたところ。その図は『石山寺蔵四百画面 源氏物語画帖』や『九曜文庫蔵 源氏物語扇面画帖』にも見られる。しかしながら本画帖は弓を射る人が片肌を脱ぎ、背中の左半分も肌が見えている点の特異である。他の作品は脱いでいないし、そもそも源氏物語絵において肌が露わな描き方は珍しい。もともと『国宝源氏物語絵巻』では自邸にいる雲井雁に二例見られ、夜中に泣き出した乳児に乳を含ませているところ(横笛の巻)と、衣一枚で腕などが透けて見えるところ(夕霧の巻)である。けれども後世の作品では肌の露出はなくなり、とりわけ源氏絵が婚禮道具になった江戸時代ではまず見られない。

名古屋市博本も肌は見えないが、室内に光源氏、他に男性四人は「源氏御手」と共通する。さらに「源氏御手」には少年が一人控えるが、名古屋市博本と『石山寺蔵四百画面 源氏物語画帖』『九曜文庫蔵 源氏物語扇面画帖』には少年はいない。

D 第四十六帖(榎本の巻)

詞書は巻頭近くで、匂宮たちが宇治に泊まったとき、対岸に

住む八の宮から薫に手紙が届き、匂宮が代わりに返歌した箇所である。『源氏物語絵詞』に、「宇治、匂宮まいり給。公家、多あるへし。大臣の子共あるへし。ご、すくろくあるへし。もとよりかはらけ、とりくあそひのてい、くわんけんあるへし。

宇治のはたなり。夕きりの公達、六人あるへし。其外あるへし。」と記されたように、匂宮の外出には大勢の臣下たちが同伴している。この場面を描いた和泉市久保惣記念美術館蔵『源氏物語手鑑』には、少年も含め計八人もいる。ところが本画帖では二人しかない。

本画帖に似た図が、『九曜文庫蔵 源氏物語扇面画帖』椎本の巻に見られる。部屋の内にある烏帽子姿は手紙を広げ、端にいる冠姿と向き合っている構図は本画帖と共通する。ただし九曜文庫は同じ巻ではあるが別の場面で、八の宮が亡くなり見舞いの使者を送った匂宮が、返事を見ているところである。よって本画帖に描かれた二人は匂宮と薫だが、九曜文庫は匂宮と使者になる。

藤田紗樹氏は名古屋市博本の場面を九曜文庫本と同じ(⑤一九五頁)と判断されたが、名古屋市博本は詞書がないので、「源氏御手」(⑤一七二頁)と同じ可能性もありうる。いずれの図も匂宮は烏帽子で、もう一人は冠を被っている。冠の方が正装なので、薫ならば

匂宮に敬意を表していると解釈できるが、使者は源氏絵では通常、烏帽子である。ことによると匂宮と薫の図を、九曜文庫本は別の場面に転用したのかもしれない。

#### E 第十帖(賢木の巻)

本画帖は光源氏が頭中将たちと韻塞みんたせに興じている場面である。絵には室内に四人の男性がおり、一人は本を手を持ち、他の三人は畳の上に冊子をそれぞれ置いている。この書物を恋文に置き換えると、本画帖にも描かれた雨夜の品定め(帚木の巻)と同じ図様になる。

賢木の巻の詞書を全文引用すると、「又、いたつらにいとま有けなるはかせともめしあつめて、ふみつくりんふたきなとやうのすさひわざともをもしなと、心をやりて、みやつかへもおさくし給はず」(三二二頁5行目)とあり、まだ博士たちを呼び寄せた程度である。物語はこのあと、大勢の専門家を呼び韻塞を盛大に催して源氏が勝ち(甲)、負けた中将は負態まじわをする(乙)と続く。甲の図はバーク財団蔵、乙は『石山寺蔵四百画面 源氏物語画帖』や承応三年版本に取りあげられているが、本画帖の場面は管見の限り見出せない。

「源氏御手」と名古屋市博本の共通点は、以下の通りである。烏帽子をかぶった四人が車座になり、厨子を背にした人は冊子を広げて

床に置き、右端の人は書籍を広げて持つ。三冊の冊子は閉じたまま床に置かれている。簀子も長押も「く」の字形である。

注①の小稿では「以上のA-E以外にも、本画帖には稀な例が多い。」として教例を挙げたが、それらはすべて名古屋市博本とは場面が違う。

さて名古屋市博本は五四図あるが、一帖に一図ずつとは限らないかもしれない。藤田紗樹氏の調査によると、どの巻か不明なのが一図、一卷に二図あるのが四巻とされた(注②参照)。しかしながら不明の例は「源氏御手」東屋の巻と同じであると判明した。そこで二図ずつある四帖のうち総角の巻を見てみよう。二図あるうち第一図は藤田氏が、「薫、屏風を押し開け大君に迫るが拒まれる。」場面とされたのでよからう。匂宮が初めて浮舟に近寄る図(東屋の巻)にも似るが、床の間に仏画らしい条幅が掛けられ、その前に仏具が置かれているので、総角の巻と判断される。

次の第二図(末尾の図f)を藤田氏は「匂宮、中の君と明けゆく宇治川を眺める。」とされたが、これは浮舟の巻で薫と浮舟が歌を詠み交わした箇所ではなからうか。物語には、

山の方は霞み隔てて、寒き洲崎に立てる鵜の姿も、所がらはいとをかしく見ゆるに、宇治橋のはるばると見たさるるに、

柴積み舟の所どころに行きちがひたる(⑥一四五頁)

とあり、傍線を付けたモチーフが描きこまれている。鵜は通常、一羽であるが、「源氏御手」と名古屋市博本は二羽で、この点からも両作品の関係の深さが窺える。名古屋市博本には浮舟の巻はない、と藤田氏は見なされたが、総角の巻第二図を浮舟の巻とすれば、両巻とも一図ずつになる。

あとの三巻(末摘花・紅葉賀・若菜下の巻)は藤田氏の調査によると、いずれも第一図は他の作品に類例があるが、第二図は他に見せず、ことによると別の巻の可能性がある。若紫・御法・早蕨の巻は絵を欠くが、第二図のいずれかが当てはまるとは認めがたい。「源氏御手」との照合により、名古屋市博本には無いと思われた東屋・浮舟の巻はあることが分かり、両作品で似る図は半数近くにも及ぶ。今後も他作品との比較により、名古屋市博本は五四帖揃いなのかどうか考察を続けていきたい。

#### 注

① 岩坪健「源氏物語画帖「源氏御手か、み」(同志社大学所蔵)の紹介、『同志社国文学』第八一号、二〇一四年一月。本画帖は全図が同志社大学図書館デジタルコレクションにて公開されている。

② 藤田紗樹氏「近世前期における白描物語絵制作の様相―名古屋博物館蔵「白描源氏物語画帖」と「伊勢物語手鑑」の制作をめぐって―」(『名古屋博物館研究紀要』第四四巻、二〇二二年三月)。

③ 源氏物語の本文は新編日本古典文学全集により、③一九七頁は第三冊の一九七頁を示す。

〔付記〕 画像の提供および掲載を許可してくださいました名古屋博物館に深謝いたします。

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」(同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究(二〇一九～二〇二二年度)、および「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」(科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二二年度)における研究の一部であり、また宮廷文化研究センターの事業の一環である。

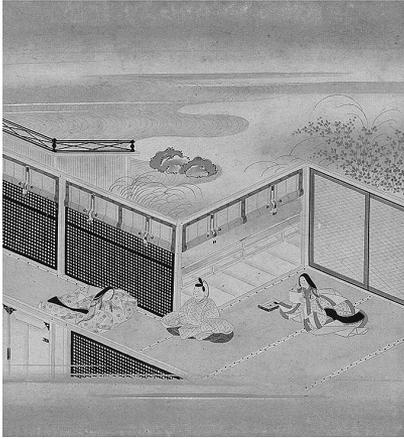
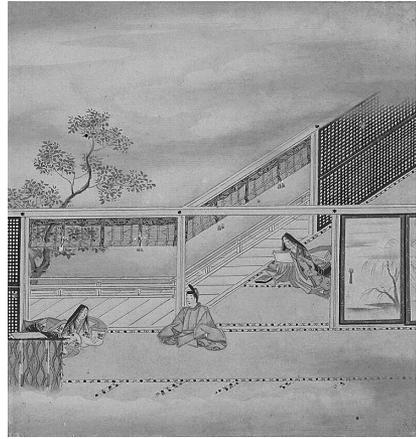


図 a 名古屋市博本 螢の巻



図A 「源氏御手」 螢の巻

源氏物語画帖「源氏御手か、み」(同志社大学所蔵)の再考察

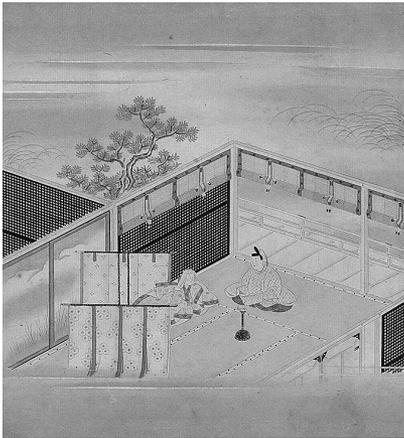
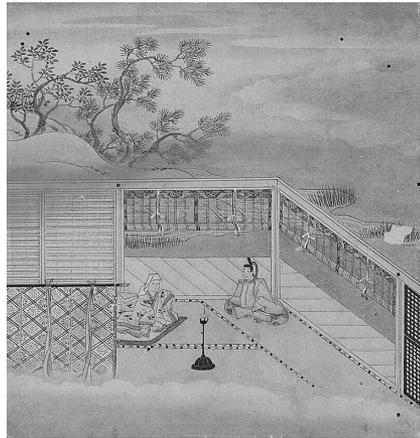


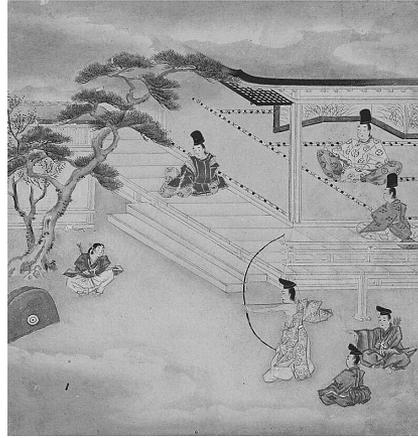
図 b 名古屋市博本 「場面不明」



図B 「源氏御手」 東屋の巻



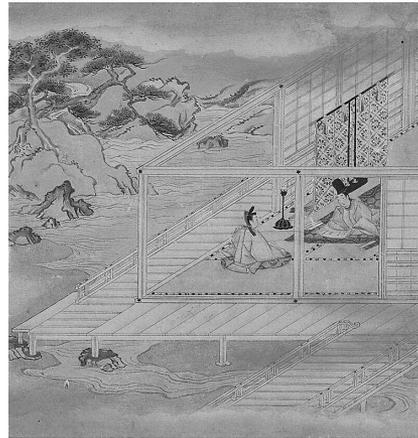
c 名古屋市博本 若菜下の巻



図C 「源氏御手」若菜下の巻



図d 名古屋市博本 椎本の巻



図D 「源氏御手」椎本の巻

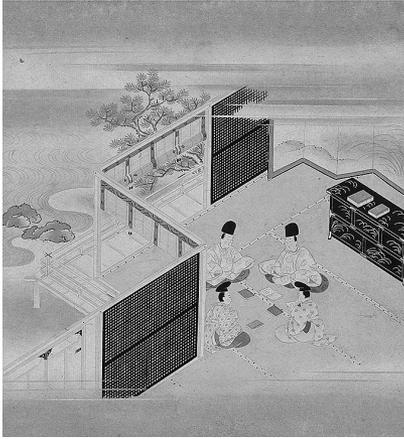
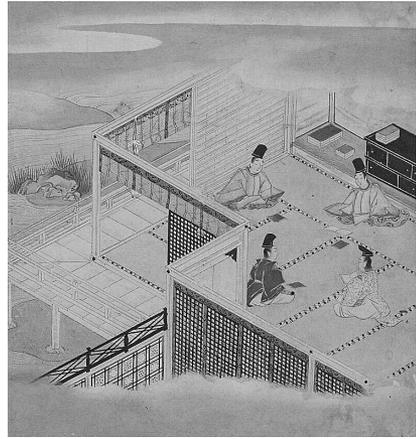


図 e 名古屋市博本 賢木の巻



図E 「源氏御手」賢木の巻



図 f 名古屋市博本 総角の巻



F 「源氏御手」浮舟の巻